

旭川市

井上靖記念館報

第7号



生誕百年に思う——靖と旭川

浦城 いくよ



父が亡くなって七

年、今年が生誕百年にあたるが、振り返ってみると旭川は父の八十三年の人生の最初と最晩年に大きく関わった所である。

昭和三十年七月、父は四十八歳の時、文芸春秋社の文化講演会のために初めて旭川へ出かけている。講演会の前日の夕方、自分の生まれた当時の陸軍官舎のあった所を訪ねている。「そこは砂塵のもうもうとした町外れの淋しい一区劃であった。私はそこに長く立つてはいられなかった。」そこは母親からいつも聞かされていた——長い冬がようやく去って、百花が一時に開き、すずらの匂いが漂っている空気の中で産声を上げた——自分がひそかに誇りに思っていた五月の旭川とはあまりにも違っていたのであろう。

しっぽに旗を立てて、故里に帰った

故里は白い砂塵の中に昏れかけていた

これは学生時代に作った詩であるが、こんな気持ちだったと『出生地の話』というエッセーに書いている。

それから二十四年を経て昭和五十四年十一月、七十二歳の時に北海道新聞社の文化講演会のために私の母を伴って旭川に来た時、「僕の生まれた所へ行ってみようよ。」と生誕地に行っている。当時の官舎がまだ幾棟か残

っていた。街路樹のナナカマドの赤い実が雪をかぶって美しかったと母は「靖と旭川」の中で書いている。

それから十年たった平成二年九月、八十二歳の時に旭川市開基百年の式典に招かれて訪れている。その日はまたとないような好天気

にめぐまれ、式典は大雪アリーナで行われた。市長や議長さんたちに続き父も祝辞を述べ、旭川のために作った詩「私は十七歳のこの町で生れ、いま百歳のこの町を歩く……」を全身の力を振り絞って読み上げた。五千人を超える聴衆の盛大な拍手が続いた。父の最後の華やかな舞台であった。

前日、旭川信用金庫の前の大通りに面した所に建立されたこの詩碑の除幕式が行われた。碑の前のショーウインドウには当時ベストセラーになっていた「孔子」をはじめ、碑文の原稿や著書も並べられ、通る人の目を引いていた。夜は「私の孔子」と題した講演もあり、宿泊しているパレスホテルの会場には千人を超える人が集まった。食道の手術のため前かがみになっていた身体であったが力のこもった話しぶりだった。今回の旅でもまた私や同行者を大勢連れて、



旭川に建立された詩碑の前で(平成2年9月)

かつての官舎を見に出掛けた。また二、三軒ではあるが建物は残っていた。

父の八十三年の生涯は他の人に比べてやたらに忙しかった。遠い北海道にある生誕の地に思いをはせる閑もなかったに違いない。父からは旭川の話は聞いたことがなかった。全く記憶にない所の話などしようもなかったであろう。しかし最晩年になって生誕の地を何かのきっかけでふつと思つた時、急に旭川が身近なものとして思えてきたのではなからうか。父は「旭川ノート」というものを作っている。新しく書き入れ始めたもので、これから旭川に関することを集めていこうとしたものに違いない。ガンの再発で本当に体力の限界ギリギリの旅であった。いつもの意思の強さで何が何でも出かけたが、誰が見ても大変な状態であったので私は父母に同行した。静岡県長泉町の井上文学館友の会の方たちも最後の旅行と分かって旭川まで多くの方が同行された。今までもおろそかにしてきた生誕の地、旭川に報いるための義理がたい父の精一杯の懺悔の旅ではなかっただろうか。父の散文詩や多くの作品は暖かな南国の香りのするものはほとんどない。多くの人が語っているように白のイメージ、北国のイメージを持つ作品が多い。これは言葉には出さなかつたし、自分でも気づいていたかどうかは分からないが、自分の原点である生誕地旭川へのあこがれが実は無意識のうちにあつたのではないだろうか。

父にとって生まれて最初の旅が旭川から伊豆への旅であり、人生最後の旅もまた旭川から東京の自宅へ帰る旅であった。

(井上靖長女・井上靖記念館相談役)

井上靖の生まれた百年前の旭川

東 延 江

作家であり詩人の井上靖は著書『幼き日のこと』の最初の稿を「旭川」で書きはじめている。

—— 私は明治四十年（一九〇七年）に北海道の旭川で生れた。父は当時第七師団軍医部勤務の二等軍医であった。父は二十七歳で、母は二十二歳であつた。

—— 中略 ——

自分が生れた旭川という町にも、自分が生れた五月という月にも理由のさだかでない誇りを感じていた。旭川についても、その五月についても、いかなる記憶も、思い出も持っていないということは、そういう誇りを持つことに対して、いささかの妨げにもならなかつた。寧ろそうしたものがなければ、自分の生誕の町、生誕の月に対して誇りを持てたのである。——

少しばかり長い引用になったが、若い母のお腹の中で旭川の土を踏み、一歳にもならず旭川の地を離れた作家井上靖の生誕の地への思いがこの一冊の冒頭にこの様に書かれていることに、旭川という街の明治四十年にいつときタイムスリップしてみたい。

明治四十年前後の旭川駅は、同三十一年十一月開駅、同三十七年十一月改築の

駅だった
が、写真等
で見ると
りは、駅前
は雑草、ヤ
チハンノキ
の巨木が一
本、井戸場
らしい小
屋。この井
戸水は、馬
や旅人の飲料に使われていたという。
夏には巨木にはクワガタ、カブトムシ
蟬がとまり、子供たちの格好の遊び場
だった様子がうかがえる。



旭川駅（明治37年～大正）

開駅と同時に駅弁も扱う待合食堂の「日の出食堂」「高田食堂」が今の駅前交番あたりにあり、「エスタ」のあたりには、旭川運輸、保線、建設の鉄道関係合同事務所。西武デパートのところには、明治四十二年一月二十日に釧路に向かう石川啄木が泊まり短歌
名のみ知りて縁もゆかりもなき土地の
宿屋やすけしわが家のごと
他一首を残した旅館宮越屋がある。
ざつとこんな旭川駅前風景の中、若妻は、お腹の赤子を大事そうにかかえて第一歩を踏んだのだ。
この時から五年前、旭川では今だに破られない国内最低温度マイナス四十一度

が記録されたほどだったから、さぞかし、一月の旭川は寒気が肌を刺したことだったろう。

若い母のお腹の中で旭川という未知の町に第一歩を踏み、それから五ヶ月後の桜も梅もツツジも一度に咲きほこる季節の五月六日、二区三条十六―二の師団官舎の一室で赤子は産声をあげた。のちの作家・詩人井上靖の誕生であつた。

前年には小笠原善平が同じ旭川の地で『寄生木』の最後の章をまとめていた。

明治二十三年九月、開村以来、屯田兵入地、第七師団移駐によつて、旭川はいちじるしく発展していった。

明治四十年に入ると駅前から六条あたりまで、今の昭和通りから旧師団通りをはさみ緑橋通りはデパートをはじめ、さまざまな職種
の商店、金融機関が軒をならべ、軍都の名と共に一躍商業の町へと発展してい



旭川駅前（明治42年頃）

た。
マー
ケット
形式の
合同店
舗「勤
工場」
が人々
の足を
運ばせ
てもい
た。



旭橋（明治40年代～大正初期）

私の生まれるはるか前、私の母の生まれる三年前の旭川は賑わいの町であつた。現在の繁栄とはちがひ、人と人とのぬくもりやつながりがずつと深かつたことであろう。

——自分が五月に生れたということも幼少時代の私にはすばらしいことのように思われた。母が時に五月の旭川の百花が一時に開く美しさを語るのを聞いたりとすると、私は誰よりも恵まれた出生を持っていると思つた——

著書『幼き日のこと』の中の一節だが、生まれたということ誇りに思い、心に深く留め、書き残してくれた作家井上靖のいたことに、旭川に住む私は誇りに思いたい。

生誕百年という節目の今年、テレビの画像は、井上作品『風林火山』で人々を魅了させている。（文中敬称略）

（井上靖ナナカマドの会会員）

企画展

【井上靖／詩と生涯】

四月十一日（火）―六月十八日（日）
井上靖は詩人として出発した作家である。中学時代に文学に目を開き、爾来、靖の詩筆は絶えることはなかった。

企画展では、靖の詩の中から二十四篇を抽出し、靖の人生と重ね合わせ、詩の内面性の顕在化に努めてみた。

第一章「詩人の出発」では藤井壽雄との出会い、第二章「咆哮する詩人の魂」では母や糸との確執、第三章「発酵する詩人の魂」では、影響を受けた詩人達に關わる詩、第四章「詩人のノート」では小説の種となった詩、第五章「旅と詩人」では西域への紀行詩、第六章「黄昏ゆく詩人の魂」では晩年の癌との闘病から生まれた詩を展示し、井上靖の生涯にわたる魂の軌跡を紹介した。

【屯田作家 板東三百展】

六月二十四日（土）―七月二十三日（日）

板東三百は、旭川市永山の屯田兵屋で百年前に産声を上げた。そしてその兵屋にまつわる作品を書き続け、「屯田作家」と呼ばれていたが、四十歳で病没。企画展では、中学時代の資料をはじめ、師と仰いだ宇野浩二の手紙、写真、掲載誌などを展示し紹介した。

（旭川文学資料友の会と共催）

【井上靖と歴史小説】（日本編）

七月二十九日（土）―十月二十九日（日）

井上靖の日本を舞台にした歴史小説には、戦国時代に取材したものが多く、それぞれ戦国乱世に生きる人間を描いている。それは、動乱に明け暮れる戦国時代には、人間の悲劇が、どんな時代よりも鮮やかにあらわれるからであろう。

企画展では、『戦国無頼』『風林火山』『淀どの日記』『後白河院』『本覚坊遺文』『真田軍記』等を取り上げ、無慈悲の濁

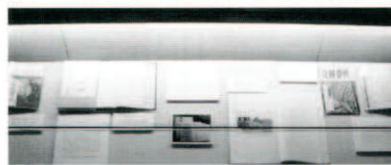
流の中に巻き込まれ、歴史の流れに翻弄されながらも強く生きる人間の姿を紹介した。

【井上靖／西域への夢 パート2】

十一月四日（土）―一月二十八日（日）

靖の西域作品の多くは、古い中国史に取材し空想を広げているところに特徴がある。それは、学生時代から持ち続けた、西域に対する未知、夢、謎、冒険と言った憧憬への表れでもある。

企画展では、第一章、器物が流転する数奇な運命をモチーフに描く作品、第二章、歴史という時の流れの中に人間の孤独な生を描く作品、第三章、沙漠地帯西域南道を舞台に空想の世界を広げる作品、第四章、往還道に立つて靖の目を通して描いた作品、第五章、靖が撮影した感



動の写真集、第六章、靖・西域への思いを語るとして、小説、詩、隨筆、紀行文などから、井上靖が追い求めていた西域への夢を紹介した。

【井上靖と現代小説】

二月三日（土）―三月二十五日（日）

井上靖の現代小説における特徴をあげると、処女作『獵銃』と『闘牛』に共通する主人公の虚無的行動人としての「白い河床」のイメージであるが、これは井上靖文学の本質的な基調であるとも言われている。

企画展では、井上靖作品の基調をなしているフアクターを観点に、第一章、井上靖文学の基調をデビュー作品に見る、第二章、詩からの出発、第三章、孤独のイメージを絵画的に描く、第四章、理想の女性像への憧憬を描く、第五章、非社会性・純粹培養型恋愛を描くとして、現代社会に生きるさまざまな人間像から井上靖文学の魅力を紹介した。

平成18年度のあゆみ

- 4月11日～6月18日
 - ・第1回企画展「井上靖／詩と生涯」
- 6月24日～7月23日
 - ・第2回企画展「旭川ゆかりの文学者 屯田作家 板東三百展」
(旭川文学資料友の会共催)
- 6月24日
 - ・文学講演会「パステルナークと井上靖『ドクトル・ジバゴ』再読！」
- 7月8日
 - ・旭川文学散歩「春光台・近文の文学碑めぐり」
- 7月12日
 - ・井上靖記念館運営協議会
- 7月27日
 - ・夏休みおはなし会
- 7月29日～10月29日
 - ・第3回企画展「井上靖と歴史小説（日本編）」
- 8月4日
 - ・夏休みおはなし会
- 8月26日
 - ・ロビーコンサート「音楽と詩の楽しみ」
- 9月9日
 - ・昼下がりの朗読会Ⅰ『颯風見舞い』の朗読とギター演奏
- 10月7日
 - ・文学講座「国民文学論と井上靖の歴史小説」
- 10月12日
 - ・井上靖の映像の世界『千利休 本覚坊遺文』
- 10月19日
 - ・井上靖の映像の世界『風林火山』
- 11月4日～1月28日
 - ・第4回企画展「井上靖／西域への夢（part 2）」
- 11月11日
 - ・文学講座「井上靖と『孔子』」
- 11月19日
 - ・昼下がりの朗読会Ⅱ「二木てるみ氏による『胡姫』の朗読」
(井上靖ナナカマドの会共催)
- 1月23日
 - ・井上靖記念館運営協議会
- 1月27日
 - ・読書会「井上靖文学の流れを辿る」
- 2月3日～3月25日
 - ・第5回企画展「井上靖と現代小説」
- 2月17日
 - ・冬のおはなし会



自主事業の概要報告

◆文学講演会

「バステルナークと井上靖『ドクトル・ジバゴ』再読！」

とき 平成十八年六月二十四日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 工藤正廣氏(北海道大学教授)

講師の専門分野であり、新訳に取り組んでいるバステルナーク著『ドクトル・ジバゴ』を中心に、井上靖との比較、それぞれの文学のテーマ性について、またロシア小説と日本小説の違いなどを研究者ならではの挿話を加えながらお話いただきました。

井上靖とバステルナークは「小説家であり詩人である」という共通項があり、小説を書きながら多くの詩集を出している作家は意外と少ないとのこと。井上の『遠征路』『二月』の二篇の詩を紹介し、井上文学のテーマに母性の喪失があること、また時空のスケール感が非常に大きな作家であるというお話でした。

最後に、『ドクトル・ジバゴ』に収録されているジバゴの詩のロシア語朗読を聞きました。グローバルな視点から井上作品を再認識させられる講演でした。

◆旭川文学散歩

とき 平成十八年七月八日(土)

見学先 春光台・近文方面

講師 平野武弘氏(旭川実業高校講師)

天候に恵まれ、春光台・近文方面の文

学碑八カ所を廻りました。最初に実業高校内の徳富蘆花歌碑を見学。明治四十三年に蘆花が旭川を訪れた際、『寄生木』の主人公となった小笠原善平を忍んで詠んだ歌であることを知りました。続いて近

文墓地の宮之内一平・紫乃の歌碑を鑑賞し、北門中学校では知里幸恵文学碑を、優良良織工芸館では宮柊二の歌碑と種田山頭火の句碑を見学しました。

午後は上川神社の永山武四郎歌碑と敦賀谷夢楽川柳碑を鑑賞しました。歌の背景や作者の経歴など、様々なエピソードを伺いながらの鑑賞は、解釈が難しい短歌や俳句のイメージを広げ、旭川の文学の歴史を感じる楽しい文学散歩となりました。

◆夏休みおはなし会 ①

とき 平成十八年七月二十七日(木)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 福田洋子氏(旭川子ども富貴堂店長)

子ども富貴堂の皆さんによる絵本の読み聞かせ。最初に井上靖が子ども向けに書いた『どうぞお先に!』を朗読、次に神沢利子『こぶたのブウタ』、長新太『キヤベツくん』、佐々木マキ『ぶたのたね』を朗読後、最後に金関寿夫の『カニツンツン』をみんなで読みました。演劇的要素もあり楽しいお話会となりました。

◆夏休みおはなし会 ②

とき 平成十八年八月四日(金)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 中辻 明氏 他(旭川おはなしの会)

旭川おはなしの会の皆さんによる昔話を中心とした語り。井上靖の『くもの巣』の朗読後、『にんじんとごぼうとだいこん』『大工と鬼六』などのお話七篇を聞かせてくれました。

幼児から小学生までと参加者の幅が広く、集中力の持続が心配でしたが、手遊びなど演劇的要素をふんだんに取り入れ、趣向を凝らした楽しいお話会でした。

井上靖の子ども向けの作品は多くはありませんが、このお話を通して郷土の作家・井上靖を広く知ってもらいました。

◆ロビーコンサート

「音楽と詩の楽しみ」

とき 平成十八年八月二十六日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

演奏者 チェロ 山口 健氏

ピアノ 新町由美氏

朗読 塩尻曜子氏

記念館ラウンジにてチェロとピアノの演奏、井上靖の詩の朗読を行いました。第一部はバッハの「無伴奏チェロ組曲第三番」やショパンの「エチュード」などクラシックの名曲を中心とした演奏でした。

第二部は詩の朗読で、井上靖の『春を呼ぶな』『高昌古城』など八篇の詩の朗読を鑑賞しました。『シルクロード』の詩ではピアノとチェロによる伴奏が詩の世界に広がりを与え、塩尻曜子氏の朗読と見事に調和していました。

第三部は「浜辺の歌」や「さくらさくら」など日本の名曲が演奏され、アンコ

ールの演奏もありました。井上文学や記念館に興味を持ち、館を訪れるきっかけとなると良いと思います。

◆昼下りの朗読会

とき 平成十八年九月九日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

朗読 佐藤 鍵氏

ギター 笹野正行氏

井上靖の短編小説『颯風見舞』の朗読とギターの演奏を組み合わせて行いました。前後編の二部構成で一編の小説の朗読を鑑賞しました。

『颯風見舞』の主人公は放蕩もので憎めない人物ですが、佐藤鍵氏の抑揚を効かせた朗読が、その魅力を存分に引き出していました。朗読の合間に挟まれるギター演奏が物語の世界を盛り上げ、井上文学の豊かな情感の世界へと魅了しました。

◆井上靖の映像の世界

とき 平成十八年十月十二日(木)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

上映作品 『千利休 本覚坊遺文』

井上靖の作品は、これまでに四十本近くが映画化されています。その中から、平成元年に映画化された「本覚坊遺文」をビデオ上映し、映像を通して井上文学に親しんでもらいました。

昭和五六年「群像」に発表された『本覚坊遺文』は靖の晩年の作品です。利休の死後二七年目に初めて出会った高弟・本覚坊と織田有楽斎。この二人を中心に

利休の死の真相に近づいていくこの物語は、奥田瑛二、萬屋錦之介が共演し話題となった作品です。

参加された皆さんは名匠・熊井啓監督の映像世界を楽しんでいたようです。

◆井上靖の映像の世界

とき 平成十八年十月十九日(木)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

上映作品 『風林火山』

昭和四四年に三船敏郎主演で映画化された『風林火山』。発表は昭和五四年から翌五五年にかけて小説新潮でした。

現在井上靖生誕百年の記念の年に、大河ドラマにもなっているこの作品は、武田信玄の軍師・山本勘助の波乱の生涯を描いた小説です。訪れた方は、美しい映像とドラマティックな場面展開を存分に楽しまれていました。

◆第一回文学講座

とき 平成十八年十月七日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 片山晴夫氏(北海道教育大学旭川校教授)

近代文学史における「国民文学論」とは何かについて、また井上靖の歴史小説について講話をいただきました。

明治以降における日本の国民と文学の関係についてお話いただき、戦後読書層の広がりにもなつて「大衆小説」と呼ばれる小説が生まれ、多くの人々に親しまれたこと、大衆小説には歴史小説が多いという講話がありました。

井上靖の歴史小説にもふれ、日本近代

文学史を通じて井上の歴史小説の位地を考察する聞き応えのある講話でした。

◆第二回文学講座

とき 平成十八年十一月十一日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 石本裕之氏(旭川工業高等専門学校教授)

井上靖最後の長編小説『孔子』についての講話でした。

この小説は架空の弟子・蔦葦が孔子を思い出し、その人柄と教えを語る形式となつています。石本氏は井上の『孔子』は歴史小説であると同時に思想小説のよなものであり、読み進める時のキーワードとして「遺民」「天命」「司城貞子」「隱者」などの言葉を取り上げました。『孔子』は多くの文献を基に書かれていますが、井上は資料だけでなく、実際に何度もゆかりの場所取材旅行しており、その結果作品中の自然描写が特に素晴らしいとのことでした。

また、井上が『孔子』でどうしても書きたかったエピソードとして「葵丘会議」と「楚の莊王の話」をあげました。孔子の年譜や『論語』についての文献、当時の中国地図など『孔子』を読む際に参考になる豊富な資料も配布され、充実した内容でした。

◆昼下がりの朗読会II

とき 平成十八年十一月十九日(日)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 二木てるみ氏(女優)

昨年引き続き、女優の二木てるみ氏を迎えて、井上靖の短編小説『胡姫』の朗読と講話、朗読に関する質疑応答などが行われました。

『胡姫』は靖が金沢の第四高等学校に入学したころ、金沢のカフェで知り合った女給が、靖が世話になつていた伯父の家に滞在し、その際の伯父の心情などを描いた自伝的作品です。二木氏の朗読は、登場人物の心情が、その役に応じて巧みに演じ分けられ、表現のエキスパートによる朗読を体感することができる貴重な機会となりました。

参加者の中には目を閉じて耳を傾け、イメージの世界を膨らませて鑑賞している方もいました。

後半は井上靖記念館の概要の説明の後、二木氏によるトークが行われ、自身の活動や、井上靖作品への思いなどが語られました。

人間心理を巧みに描く、井上靖の優れた短編小説をこれからも紹介していきたいとのことでした。また言葉がもつ表現力・意志伝達力の重要性を説き、言葉で自分を表現し、他者とコミュニケーションを図ることの重要性が語られました。

朗読の活動をしている方からの質問では、朗読の時に心がけることや、発音・アクセントについてのアドバイスもあり、大変意義深い機会となりました。

◆読書会

とき 平成十九年一月二七日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 秋岡康晴氏(井上靖読書会講師)

井上靖読書会でこれまで取り上げた作品を中心に、井上文学の魅力についてお話いただきました。

まず、文学史についての講話がありました。海外には『オデッセイ』『史記』などの作品があり、日本には和歌が古い時代からありました。詩歌が散文をリードしていた時代が長く続きますが、明治以降、詩と小説の立場が逆転し、戦後は決定的となりました。

また井上の文学との出会いは詩であり、小説の核となつているものは詩精神であるとの講話がありました。

最後に、井上靖自身が朗読し解説している『氷壁』のテープを聴きました。多くの作品の紹介によって、井上文学の魅力と作者の人間性に迫つたお話でした。

◆冬のおはなし会

とき 平成十九年二月十七日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 上森仲子氏 他(旭川おはなしの会)

夏休みに開催してきたお話を、旭川お話の会の皆さんのご協力により、初めて冬の季節に行いました。

『十二月のおくりもの』『雪女』『ゆきんこ十二郎』など冬にちなんだお話をしていただきました。子どもたちも熱心にお話に耳を傾け、手遊びにも喜んで参加していました。



井上靖生誕100年(明治40年5月6日誕生) 平成19年度の事業

自主事業

文学散歩

○市内の文学碑・歌碑等を巡り作品を鑑賞。

講師：平野武弘氏

6月16日(土) 9:00~15:00

行き先：旭川市内、常磐公園他

夏休みおはなし会

○親子で絵本や物語の世界を楽しむ。

講師①：福田洋子氏他

講師②：上森仲子氏他

①7月26日(木) 13:30~15:00

②8月2日(木) 13:30~15:00

昼下がりの朗読会

○井上作品の朗読と音楽演奏。

朗読：サークルいづみ

ギター演奏：笹野正行氏

10月下旬(予定) 13:00~15:00

文学講座

○井上靖作品の解説をとおして、井上文学の魅力を紹介する。

10・11月(予定)

冬休みおはなし会

○語り部によるお話により、物語を楽しむ。

1月中旬(予定)

読書会

○井上靖作品の読書と解説。

平成20年1月末(予定)



父隼雄



靖



母やゑと
(旭川でお宮参りの時)

生誕百年記念事業

5月6日(日) 生誕記念日無料開館

○シンセサイザーの演奏と詩の朗読

演奏：大湊幸秀氏

朗読：塩尻曜子氏

会場：井上靖記念館ラウンジ

①10:30~11:30 ②13:30~14:30

9月6日(木)

○朗読会「朗読劇『獵銃』」

朗読：女優 二木てるみ氏

会場：旭川市民文化会館小ホール(18:30~20:30)

(井上靖ナナカマドの会共催)

11月7日(水)

○文学講演会「井上靖の人間像と作品」(仮称)

講師：作家 宮本輝氏

会場：ロワジールホテル(18:30~20:30)

(井上靖ナナカマドの会共催)

企画展

井上靖と現代小説 パート2 4/1~5/20

~小説『氷壁』の周辺を中心に~

『氷壁』創作の元となった、ナイロンザイル事件の周辺と、その関係者使用の登山用具などを展示。

生誕百年記念展 直筆原稿『幼き日のこと』から

6/2~8/26

1972年9月から翌年1月まで、毎日新聞に連載された少年時代を描いた『幼き日のこと』の直筆原稿を中心に展示。

旭川ゆかりの作家 今野大力展(仮称) 9/8~10/8

旭川で育ち、大正末期から昭和にかけてプロレタリア詩人として活躍したその業績を紹介する。

(旭川文学資料友の会共催)

生誕百年記念展創作資料『おろしや国酔夢譚』から

10/13~1/14

大黒屋光太夫という一人の漂流民が辿った足取りを描いた歴史小説。取材資料やメモ等を中心に展示。

井上靖の直筆色紙展(仮称) 1/19~3/23

生前井上靖が多くの人々との交流のなかで残した直筆の色紙等を中心に展示。

生誕百年記念関連事業

■NHK大河ドラマ「風林火山」巡回展

○衣装・歴史パネル等を展示。

5月22日(火)~5月30日(水)

(主催：NHK旭川放送局)

■井上靖研究会

○全国の井上靖研究者による研究発表と交流。

基調講演：井上修一氏(井上靖長男)

研究発表：顧 偉良氏、玉村周氏

7月15日(日) 13:00~16:30

*会場は、いずれも当館ラウンジ

職員異動のお知らせ

▽転出 嘱託職員 齊藤知子

▽転入 嘱託職員 立田純子

▽転入 嘱託職員 伊藤かずみ

▽転入 臨時職員 福井真美

編集後記

▽母の腹部の繭のようなものに、さなぎのように仕舞い込まれていた靖。そこから誕生して百年。記念すべき年である。旭川は今、靖の母が語っていた、百花が一時に開く美しい五月を迎えている。

合計	18年	17年	16年	15年	14年	13年	12年	11年	10年	9年	8年	7年	6年	5年	平成
一八七、〇三六	六、三三一	七、七七二	一〇、〇七七	一三、四九六	一一、四七五	一一、四五〇	一三、五三六	一五、八四八	一六、八三二	一四、六三九	一四、八九三	一六、五九九	二〇、三八五	一一、七〇三	人数

《年度別入館者数》